

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 26

1987年12月10日

## 第26号 目 次

1. 学術文化情報
2. 新刊紹介
3. 近着会員業績
4. 事務局から

### ○ラテンアメリカ研究センターめぐり

#### 1. 学術文化情報

ラテンアメリカ地域アジア・アフリカ学会  
第5回大会（ブエノスアイレス）

本年9月7日から11日まで、ブエノスアイレス大学法学・社会科学部（Facultad de Derecho y Ciencias Sociales）を会場としてALADA（Asociación Latinoamericana de Estudios Afroasiáticos）の第5回大会が開催された。本学会からは、大林文彦、国本伊代、国本和孝、松下洋、堀坂浩太郎、大島ヒトシ（国際交流基金派遣ブエノスアイレス大学教官）と私が参加した。以下開会式が行われた初日を除き、いくつかの分科会に出席し、最終日の午後には発表を行った私の見聞を記し、参加報告に代えたい。

火曜日から金曜日までの4日間の午前と午後にそれぞれ4ないし5の分科会が平行して開かれ、研究報告が行われた。分科会の題目は、歴史、政治、経済、社会、思想、宗教、文学、芸術、女性、少数民族、奴隷制、教育、学術文化関係、経済関係、国際関係など多岐にわたった。各分科会では少ない時で3、多いときで8もの報告ペーパーが読まれ、討論の時間もないことがあった。反面、予定していた報告者が財政的な理由から、到着していないことも目についた。

また、私の個人的関心から出た分科会の研究テーマは、本来のアジア、アフリカ研究というよりも、ラテンアメリカとそれらの地域との関係、ラテンアメリカの中にみられるそれらの地域の影響（例：アフリカ文化、日系

人や韓国社会）など、やや周縁的な分野に属するものが多かった。全般的にも、まだ専門的なアジア、アフリカ研究者が少なく、外国で調査を行っていくという事情からそのような傾向はあるようである。用語は西語と葡語で、例外的な英語での発表には通訳がついた。研究関心と語学能力の制約から、日本から本格的な日本ないしアジア研究者ではなく、私のようなラテンアメリカ研究者が出席したわけだが、無理もないと思った。

私は、「環太平洋圏」という分科会で「ラテンアメリカと日本の補完関係の展望」という報告を行った。メキシコのクナウト、D・トレド両氏の報告が面白く、同国でかなりこの問題に関心が強いことが推察された。

夜のエンターテイメントとして、別会場で夕食会、茶の湯、東南アジア舞踏、アルゼンチンの児童合唱団、ブエノスアイレス大学学生による厳密な考証に基づくバレエ・folklorico、ブエノスアイレスのコメディ・ネグラ（アフリカ系少数集団の歴史劇）などが連日のように行われ、参加者を楽ませた。私は、最後の二つに最大の意義を見いだした。

衝撃的だったのは、ブエノスアイレス大学の現状である。昨年、科研費予備調査でこの地に来た際にも、軍政権期の思想弾圧と自由入学制のため、アルゼンチンの大学における研究体制がほぼ崩壊した、という学者に会っていたが、今回会場に数日入りしただけの印象でも、深刻な事態であると思った。列柱を前面に立てたネオ・クラシック様式の堂堂たる法学部の大会議室の壁は一部はがれ落ちかけたままに放置され、講堂の内部の扉付近が便所臭く、不思議に思っていると、翌日その近くに積み上げてある不用椅子の山の陰から孤児と思われる子供が出てきた。現地の学者に聞くと、国からほとんど予算が出ないとのことで、研究費はおろか、基本的な保守、清掃の人員、費用も不足していると思われる。専任の教官の月給が100ドルにも達せず、

語学教育が無給の非常勤講師の奉仕活動に依存しているとも聞いた。伝統あるこの大学の現状がこうでは、次の世代の教育はどうなるのかと心配になった。アルゼンチンの人々が再び豊かさを取り戻す日が早く来ることを願って空港を後にした。(山田陸男)

ラテンアメリカ・カリブ研究国際連合  
(Federación Internacional de  
Estudios sobre América Latina  
y el Caribe) 第3回総会

1987年9月23日から26日まで、FIEALC第3回総会がニューヨーク州立大学(バッファロー校)で開催された。同連合は欧米、ソ連・東欧、ラテンアメリカ、アジア等の主要なラテンアメリカ研究機関で構成されており、日本では南山大学ラテンアメリカ研究センター、上智大学イベロアメリカ研究所などの関連研究組織が加盟している。

総会には延べ200人が参加。人類学、歴史、言語学、文学、書誌、社会科学、哲学および、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アフリカ・東洋各地域におけるラテンアメリカ研究というセクションに分かれて、報告・討論が行なわれた。日本からはアンドラーデ(上智大学)が「日本におけるラテンアメリカ研究」について報告した。

次回総会は1989年パリで「フランス革命とラテンアメリカ」をテーマに開催の予定である。1991年には総会を日本で開催してほしいとの要請があるので、本学会でも今後検討していただきたいと思う。

また、アンドラーデはこの総会に先立つ8月26日から9月18日まで、国際交流基金海外派遣専門家としてコロンビア、ペルーに派遣され、日本とラテンアメリカの関係について、「日本におけるラテンアメリカ研究の現状と限界」、「今日の日本、豊かさの中の危機」、「日本の外交政策決定過程と対ラテンアメリカ政策」、「日本の歴史におけるラテンアメリカ」という4テーマで、主要大学、産業協会、コロンビア歴史アカデミー等で講演を行なった。多数の聴衆が集まり、日本に対する関心の高さを知ることができた。

(グスタボ・アンドラーデ)

ラテン・アメリカ政経学会第24回大会  
ラテン・アメリカ政経学会の第24回全国大会が11月7・8日、上智大学で開催された。プログラムは以下の通り。

11月7日 シンポジウム 「南米の民主化と経済政策」 司会：水野一(上智大学) 報告者：今井圭子(上智大学) 西島章次(神戸大学) 加賀美充洋(アジア経済研究所) 討論者：大原美範(神奈川大学) 田中健二(日本輸出入銀行)

11月8日 研究発表 三田千代子(上智大学) 「ブラジルの国家統合と移住者集団」 原田金一郎(大阪経済法科大学) 「J.C. マリアテギの思想と理論 — 『七試論』を中心にして —」 湯川攝子(京都産業大学) 「財政赤字と政治体制 — ラテンアメリカとアジアの比較 —」 小池洋一(アジア経済研究所) 「ブラジル企業の行動様式」 グスタボ・アンドラーデ(上智大学) 「アンデス諸国の政治情勢 — コロンビアとペルーを中心として —」

日本イスパニヤ学会第33回大会

日本イスパニヤ学会の年次大会が11月7・8日、関西外国語大学で開催された。プログラムは次の通り。

11月7日 講演 José Montero (Northern Virginia Community College 教授) 「Repaso de gramática española con ayuda de ordenador」 神吉敬三(上智大学教授) 「プラド美術館の至宝 — その歴史的、美術史的意義 —」

11月8日 研究発表 原誠「中南米スペイン語におけるたるみと張り説再再考」 宮本正美「口語スペイン語における時制の相関関係について — パソコンによる文法分析の方法 —」 酒井優子「スペイン語の地名形容詞の派生語尾に関する形態音韻論的考察 — -ero と -ario —」 高橋寛二「語彙から見たスペイン語の教科書」 浅香幸枝「パン・アメリカン二世大会 — アイデンティティと連帯と —」 橋本啓子「マルティン・サントス『沈黙の時』における隠れた意味」 牛島信明「読む行為としての『ドン・キホーテ』」

## ポルトガル・ブラジル学会

ポルトガル・ブラジル学会 (AJELB) の第21回大会が10月17・18日、大阪外国語大学で開催された。研究発表は次の通り。

M・エレナ・カマシヨ「フロルベラ・エスパンカ — 人と作品 —」 ジョゼ・アルヴァレス「ポルトガル語と心理学」 日向ノエミア「Ter, Estar, Haver, Ser, Existir 動詞と“ある”、“いる”」 ジョゼフ・ルイテン「ブラジル民俗文学におけるカモンエス」

## 2. 新刊紹介

「特集・メヒコの文化学 詩・身体・アイデンティティ」

『季刊 iichiko』No.4 (三和酒類株式会社)  
1987年7月25日発行 128p.

メキシコ社会は複雑な現代世界の縮図だといえるし、その文化もきわめて多様であり、簡単にはとらえにくい。季刊 iichiko の編集長・山本哲士は、このようなメキシコに焦点をあてて、本特集を「メヒコの文化学」と銘打ち、「メヒコの中心的課題に的を射た、はじめての総合的イントロ」として位置づけている。

この特集は、メキシコの代表的知識人や話題作を書いた著者等に対してなされたインタビュー記事に特色があるといっていよい。オクタビオ・パスは近作『ソル・ファナ — 信仰の罫 —』に触れて、ソル・ファナをメキシコが生んだ最初の世界的人物だと述べ、またメキシコを強固なアイデンティティを持つ国と主張している。『人体とイデオロヒーア』の著者アルフレド・ロベス・アウスティンは、古代アステカ族の独自の宇宙観を、人体との関連において解釈する。人類学者である彼は、「私たち一人一人のなかには、社会階級の矛盾、文化的矛盾、宗教の矛盾といった、すべての矛盾が介在している」と見るが、まさにその通りだといえよう。一方、メキシコの現代文化に詳しいカルロス・モンシバイスは、メキシコを「現在なお強烈なナショナルリズムの国」としてとらえており、この国のラシスモについても、米国、南アメリカのそれとは質を異にし、単純には比較できないが、「想像を絶するほど絶大なもの」と、一般的見解とは逆の、本音をはいている。そしてエクト

ル・アギラール・カミンは、「カシーケの中にメヒコのすべてが読みとれないこともない」として書いた小説『ゴルフに死す』、メキシコ革命期のソノラ州に関する歴史書『フロンテラ・ノマダ』(流浪の国境)等の説明をしてから、原住民文化について、西洋的發展指標で判断するのではなく、内側から見るが必要と論じ、「インディオ社会の前カピタリスモの生活の中に、ポスト・カピタリスモをいかに生きるかを教えるものがたくさんある」と断言する。

この他、1968年に起きた学生運動弾圧の際の証言集『トラテロルコの夜』の編者エレナ・ポニアトウスカ、メキシコ絵画の巨匠ディエゴ・リベラの妻、フリーダ・カロを扱った同名の伝記の作家マルタ・サモラ、『初心者のためのマルクス』等マンガによる入門書で国際的に知られるリウス、といった人物にインタビューして、各人から興味あるメキシコ観を引き出している。ただし、一般読者を対象としたためか、研究者にとっては若干物足りない。

本特集では、同世代に属する日本人の次のような記事も載せている。阿波弓夫「グェリタとジャバチラ」、山本哲士「孤独のなかのアレグリア アレグリアのなかの孤独」、柳沼孝一郎「メヒコとハポンの二つの窓」、清水透「チャムーラの世界と接近の方法」。

ところで、清水はその記事の中で、「自分たちの世代は、彼ら(パスやモンシバイス)を紹介することに安住してはいけぬ」とし、日本人ならではの接近の仕方があるはずだと声明する。しかし彼が原住民社会で会得したメキシコを見る眼は、大方メキシコの一部の知識人、そしてなによりも原住民自身が、よく認識している事柄である点も忘れてはなるまい。要はそれをいかに表現し、現状を変えて行く力となるかということであろう。とにかく、この出発点に立って、離陸する段階にはある。今後の成果を大いに期待したい。

最後に一言。iichiko とは焼酎のブランド名である。それで例として挙げるわけでもないが、メキシコの原住民社会では、飲酒が貧困や失業、暴力や離婚と結びつく社会問題と化している。わが国の第二世代の研究者は、対象とする地域の、こうした問題解決に寄与するテーマに取り組むことも一方法ではなかろうか。(高山智博)

## 慶応義塾大学地域研究センター

地域研究センター (Center for Area Studies) は世界各地域の文化・社会・自然に関する学際的・総合的研究と教育を行うことを目的として、1984年4月に設立され、85年4月から本格的活動を開始した。学部を超えているだけでなく、外国人および他大学や諸機関の地域研究者や大学院生もスタッフに加えて共同研究プロジェクトを組織していること、また所長以下全スタッフが兼任・兼担で専任でないことなどに、開放的でユニークな性格を窺い知ることができる。年一回CAS学術大会が開かれ、各プロジェクトの研究発表と懇親がはかられている一方で、内外の研究機関や研究者との交流も盛んである。センターの活動状況は随時(年数回)発行される「CASニューズレター」に記されている。各プロジェクトは2～3年の研究活動のうち、その成果をまとめた学術論文集を刊行することになっている。

85年のセンターの発足と同時にスタートしたプロジェクトは、「近代中国人物研究」「アフリカ・ラテンアメリカ関係史研究」「南米ボリビアの日系移民の疾病構造に及ぼす社会環境因子に関する研究」「地中海(南欧とイスラム圏)をめぐる宗教の比較研究」の4件であり、86年に「オーストラリアの企業経営—歴史と現状分析—」が加わった。さらに87年度から「東南アジア諸国における中国のイメージと影響力」「ポリネシア・クック諸島におけるサンゴ礁環境への文化適応過程」の2プロジェクトが新たに開始された。

ラテンアメリカを対象とするプロジェクトのうち「南米ボリビアの日系移民の疾病構造……」のグループは、医学部のスタッフに若槻泰雄氏(玉川大)を迎え、現地調査とその分析をすすめてきた。現地ではほぼ日本全国からの移住者で占められているサンファン移住地と沖繩出身者によるオキナワ移住地が選ばれ、毛髪内水銀濃度や血圧値、脳卒中や胃癌などの疾病状況が比較観察された。その結果、移住者が日本から持ってきた文化的民族的特性と移住先の自然・社会環境の結びつきが疾病構造を決定することが明らかにされた。また移住地内に住むボリビア人の血圧値や食塩摂取量がかなり高いことは、醤油や味噌などが浸透

して日本の食塩文化が移植された結果であると指摘されている。

つぎに「アフリカ・ラテンアメリカ関係史」は、奴隷貿易という不幸な発端に始まり現代に至る両地域の関係を、専門領域を異にする両地域の研究者の共同研究によって、さまざまな側面から究明するもので、「二地域間関係史研究」という新しい学問分野を開拓するものでもある。4世紀に及ぶ奴隷貿易によって全奴隷の90%以上がブラジル・カリブ海地域を中心とするラテンアメリカに輸入された(アメリカ合衆国に直接上陸したのは5%弱にすぎない)という事実にもかかわらず、ラテンアメリカを構成する黒い部分およびアフリカに対する関心は、ラテンアメリカ研究者の中で高いとはいえない。これが単に人種デモクラシー神話の影響によるものでないことは、インディヘニスモ研究が盛んなことをみても明らかである。アフリカ研究者の呼びかけで始められたこのプロジェクトが、今後の本格的研究を促す契機となることが期待される。

プロジェクトのスタッフはアフリカ研究の側から矢内原勝(慶大)、小田英郎(同)、青木一能(日大)、井上一明(松阪大)、ラテンアメリカ研究者では賀川俊彦(慶大)、石井陽一(神奈川大)の諸氏及び筆者で構成されている。これまでに「大西洋奴隷貿易とそのアフリカへの影響」「奴隷貿易とラテンアメリカにおける黒人人口の形成」「カリブ海のパン・アフリカニストたち」「ブラジルとアフリカ」「アフリカ・ラテンアメリカ関係史の新展開」「アンゴラ内戦にみるキューバのアフリカ介入」などのテーマで報告が行なわれ、研究が続けられている。また専門家によるヒアリングは松下洋氏(南山大)、福嶋正徳氏(拓大)、長嶋佳子氏(東大院)、大和田政輔氏(筆名、服部伸夫)、古谷嘉章氏(東大院)によって行なわれ、カリブ海地域におけるアフリカ文化、アフロ・ブラジリアン宗教、ブラジルとアンゴラの関係、両地域間の経済協力の展開などの問題が論じられた。このプロジェクトは88年3月にセンターとしての活動を終了し、その後は原稿執筆を行ない成果を出版する予定である。

(乗 浩子)

## 訃 報

本学会会員の寺田和夫氏（東京大学教養学部文化人類学科教授）が9月5日、大腸ガンのため死去されました。享年59才。同氏は1963年以来、ペルー各地の遺跡の

考古発掘に参加、その成果を内外の学術雑誌に発表し、わが国における核アメリカ文化研究の発展に多大の貢献をされました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

### 3. 近着会員業績

〔抜〕原田金一郎 「中米共同市場の理念と現実一途上国経済統合論から集团的自助論へ」『経済学の諸問題』（大阪経済法科大学出版部 1987.10.7）

〔抜〕高林則明 「ミゲル・アンヘル・アストゥリアスと『トウモロコシの人々』の小説世界」（Ⅶ）『研究論叢』xxix（京都外国語大学 1987.9）

〔抜〕三橋利光 「ブラジルにおけるオーギュスト・コント 実証主義の受容と展開Ⅱ 一年次回覧にみるブラジル実証主義者教会の活動（1903～12年）一」『イペロアメリカ研究』第Ⅱ巻第1号 1987.前期（通巻16号）

（上智大学イペロアメリカ研究所 1987.9）

〔誌〕『ラテンアメリカレポート』Vol. 4 No. 3（アジア経済研究所 1987.9）

〔誌〕角川雅樹 「プエルトリコ」『研究・評論・エッセー誌 人間の場から』第8号

（発行者：菊池靖・小西久也 連絡先：東海大学留学生教育センター内 1987.8.1）

〔抜〕角川雅樹 「学会の印象：第2回プエルトリコ心理学・精神衛生学会」『季刊 精神療法』第13巻第3号（通巻第50号）（東海大学保健管理センター 1987.7）

### 4. 事務局から

住所変更

○図書販売のお知らせ

英国ケンブリッジ大学ラテンアメリカ研究センター所長デイヴィッド・A・ブレイディング博士の新著を若干部数直接輸入いたしました。研究センターの出版物で、ケンブリッジ大学出版会のそれとは違って洋書店を通じては手に入りにくいものですので、この機会にお求めください。

D. A. Brading, Prophecy and Myth in Mexican History. (Cambridge Latin American Miniatures, 1984) 96p.

内容は思想史関係で、ラス・カサス、ポリバル、バスコンセロスを扱っており、同著者の「メキシコにおけるナショナリズムの起源」の続編のような位置をもつ本です。円高以前の輸入ですので、実費一冊金2200円（送料込み）を申し受けたいと存じます。

申込先 〒153 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学教養学部中南米分科 増田昭三 残部に限りがありますので先着順とさせていただきます。また、機関購入の場合納品書作成等のアルバイト謝金を分担上乘せさせていただきます。（連絡先は同上 高橋均03-467-1171）

No.26 1987年12月10日発行  
〒157 東京都世田谷区成城  
6-1-20  
成城大学法学部中川研究室内  
日本ラテンアメリカ学会事務局  
☎03-482-1181